

コロナの夏は 稲毛ぶらぶら歩き  
～近場の散策もおもしろい～

京成稲毛駅に降り立ったのは午後三時を過ぎた頃だっただろうか。  
ここから海に向かって歩いて浅間神社を訪れたのはもう四ヶ月前になってしまった。  
今日は線路に沿って千葉方面へ向かってみる。

<京成稲毛駅> [地図を見る](#)

駅舎を出て 10 歩ほど歩いてから振り返って見ると、京成稲毛駅は道端のガレージのような質素で遠慮がちな佇まいだ。今日は曇り空で雷雨の予報も出ている。右手に線路を見ながら千葉方面に向かって歩くと、線路の向こうには浅間神社から稲毛公園にかけて連なる森がうかがえる。背の高い松の木も目立ち、60 年前には白砂青松の稲毛海岸があったことを感じさせる。

<海苔屋さん> [地図を見る](#)

線路に沿った道はやがて少しずつ上っていくようになる。上り坂が始まる所にある小さなお店の、薄く消えかかった看板を見ると「小口海苔店」と書いてあった。目の前の小さな踏切を渡って、海岸を歩き来していたのだろうか。

上り坂を上がりきると広い道路に出た。左は J R 稲毛駅方面で右は稲毛海浜公園方面。幅の広い道路だが車の通りが少ないので渡りやすい。

<日蓮宗稲毛寺> [地図を見る](#)

地図を見ると、近くに稲毛寺という寺があるようなので探して見ることにした。寺は住宅地の並びの中にあるが、ひときわ目立つ朱色の建物ですぐに見つけることができた。

日蓮宗千葉山稲毛寺。一階は個人の住宅で二階が寺になっており、門を潜ると階段を上がって二階の寺へ入れるようになっているが、門扉は閉まっており、中に入ることはできなかった。

帰宅後にインターネットで調べたら、昭和 51 年創立となっていたので、新しく興した寺のようだ。

<丸子山公園> [地図を見る](#)

次の目的地は稲丘町にある三角点（海拔 22.2m）。寺を出て京成千葉線を跨ぐ。

この辺り、昔は山の膨らみが海に落ちる所だった。跨線橋から見下ろすと、舌状に張り出した尾根に切通しを作って線路を敷いたことがよくわかる。

稲丘小学校を右手に見ながら海に向かって進む。稲丘町は、1966 年に出来た町名で、それまでは稲毛町 1 丁目と言っていた。稲丘小学校は昭和 26 年創立で、創立当初の校名は稲毛第二小学校だった。旧海岸段丘の崖の上に立つ天理教の建物の前にある小さな緑地公園には丸子山公園と書いた看板が建っていた。

公園の角を半分ほど廻った、敷地の南東端に三角点があった。現在の地形図では海拔 22.2m と記されている。海岸段丘の下を走る千葉街道は海拔 3m なので、崖の急峻さは推し量ることができる。天理教とライオンズマンションが目になかった時代には、ここから真下に海が見えたに違いない。幕張・検見川あたりから続く海岸段丘地形を感じるのには絶好の場所になる。丸子山という名前は、このあたりでは公園の名前以外には見あたらない。一般的には、墳墓がある山に付くことが多い名前なので、ことによると何かがあったのかもしれない。

まだ袖ヶ浦の海が埋め立てられる前の昭和 6 年の地形図を見ると、海拔 24.2m の突起の存在が確認出来るので、その頃は今より大きな突起だったようである。昔は千葉街道を歩く人や海で仕事をする漁師達が、崖の上に立つ丸子山を目印として利用していたのかもしれない。

<旧海岸線の崖> [地図を見る](#)

稲丘町の東南端まで来ると、崖を下る急傾斜の階段が敷設されており、その階段をそのまま進むと千葉街道を渡って稲毛海岸一丁目へ降りる横断歩道橋になっている。埋め立てられる前までは、千葉街

道の先には黒砂海岸が広がっていた。急勾配の階段の途中から見上げると、崖の形もわかり、その下に広がっていたであろう海をも感じる事が出来る。

70年ほど前に、黒砂に住む親戚の家へ遊びに来た時に、急勾配の松林の中の道を下って黒砂海岸へ下りたことを思い出した。見上げれば今では雑木の林になってしまっているが、何本か残る立派な背の高い松の木が歴史の生き証人のように胸を張って立っていたのが印象的だった。

＜黒砂浅間神社＞ [地図を見る](#)

黒砂4丁目の住宅地の中の道を北東に進み、南東に走る道を進むと黒砂3丁目交差点で穴川から来る広いバイパス道路にぶつかる。バイパス道路の北側の住宅地のはずれに黒砂浅間神社がある。門前には道路拡張工事で出来た緑地公園の広がりがあり、明るい風景になっている。稲丘町から連なる山並みの途中を切り取ってバイパス道路を作ったことがよくわかる。

二十余段の石段を上がると木々に囲まれた静かで涼しい空間になる。海拔15mほどの小山の頂上に本殿が建ち、斜面のあちらこちらに境内末社らしき様々な神が祀られている。木々の間から見える下界の眺めの殆どは海だったことが想像できる。

939年(天慶2年)の天慶の乱は、律令国家が衰退して武士の動きに移行する事件だった。東国では平将門が西国では藤原純友が戦いの中心にいた。東国では平将門が勝利を収めたかに見えたが、平貞盛らの追討を受けて将門は討ち死にし約二ヶ月で敗退。敗れた将門一派の残党はことごとく征伐されたが、辛うじて逃げ延びた落ち武者が黒砂に住み着いたと言われている。落ち武者達が半農半漁で生計を立てた結果この地は開墾されて豊かな黒土の地になったというのが「黒砂」という地名の由来だと言われている。落ち武者六人が鎮守となり、六本のご神木を建てて平将門を祭神とした黒砂神社ができた。六人の名前は、中山一郎左衛門隼守・高橋八郎左衛門・渡邊久左衛門・遠藤三郎左衛門・山本世左衛門・春山與平。

1815年(文化12年)に富士吉田の浅間神社から浅間大菩薩を勧請して黒砂浅間神社となった。稲毛浅間神社の妹格と言われている。

＜緑町中学校＞ [地図を見る](#)

黒砂浅間神社を後にして、黒砂3丁目交差点でバイパス道路を跨ぐと黒砂2丁目に入る。道なりに進んで行くとみどり台駅のロータリーに出る。ロータリーを抜けた所に緑町中学校がある。

1947年(昭和22年)の学制改革により創設された当初は稲毛第五中学校だったが、1976年(昭和51年)に緑町中学校に改称された。

この辺りの住所は「稲毛区緑町(みどりちょう)」だが、学校の名前は「緑町(みどりまち)中学校」というおかしな町。ちなみにすぐそばの小学校は「緑町(みどりちょう)小学校」という無秩序な地名になっている。由緒ある「黒砂」という駅名を捨てて「みどり台」と改名し、町の名も色々おかしくしてしまった。

国土地理院の地形図によると、この学校の北西端の敷地内に海拔28.7mの三角点があることになっている。北側の校舎のやや西側の、校舎の縁あたりにあるはずだが、校内に入ることができず外からは確認ができなかった。

このあたりは現在の地形図で見ると海拔17~18mしかない。地形図の誤記なのか、昔は28.7mの高さだったが開発により削られたのちに地形図が更新されていないのか、真実はわからない。

＜石尊神社＞ [地図を見る](#)

緑町中学校の前の道をさらに南東へ進むと住宅地の一角に石尊神社がある。

道路から四段ほど石段を上がると立派な石の鳥居が海(南西)に向かって建っている。狛犬より手前に子安講のものと思われる一対の石塔が祠に収まっている。左の石塔の下部に刻まれた文字をなぞってみると「女人中」と読み取れた。

狛犬の奥にはほぼ同じくらいの大きさの社殿がふたつ建っているが、いずれも南東を向いて建っている。これは何かを意味しているのかもしれないと思い、帰宅後に調べてみたがわからなかった。

奥の社殿の脇に立つ平石には「穴川神社 明治二十九年七月」と刻まれている。

穴川にあった石尊神社から分祀された社らしいが詳細はわからない。

石尊神社は大山信仰から来たもので、大山の石尊権現を拝む信仰と言われている。関東地方各地に石尊社があるのは、大山講が盛んに行われたことと関係しているようだ。

穴川三丁目にある穴川神社は、昭和17年に道祖神社と石尊神社を合わせて誕生した。道祖神社は天明4年(1784年)に村人が創建したもので、寛文9年(1669年)に出された合祀の訴状が残っているとのこと。当時、新田町の道祖神社・千葉寺の道祖神社・穴川の道祖神社を千葉三道祖神と言った。文政7年(1824年)に佐倉藩主堀田家から許可を得て、宮野木村の能勢吉右衛門が当時入会地だった穴川村の開拓に着手した。嘉永3年(1850年)、開拓に尽力した堀田相模守・青木安太郎・白藤左衛門の三名を祀って、穴川の村社石尊神社が誕生した。

### <しめくり>

稲毛は江戸時代までは旗本知行地として農業が営まれていたり、海辺では漁業や海産物の商売もされていた。明治に入り鉄道が開通すると様変わりし、海水浴場が開設され、海気療養所を皮切りに療養地・保養地としても注目されるようになり、別荘地としても活用されるようになった。

浅草の神谷バー創設者である神谷伝兵衛の別荘跡は、「市民ギャラリーいなげ」として遺されている。明治に入ってからの変化はもうひとつある。「富国強兵」、一步内陸へ入ると、現在の千葉駅から市川駅までの至る所に軍隊の主要施設が並ぶ「軍都千葉」の一翼も担ってきた。

そして戦後になるとそれらが様々なものに生まれ変わり、やがて海は埋め立てられて住宅地や工場に生まれ変わって行った。

50年、60年、70年と時が流れて、新しく生まれるもの・生まれ変わるものがある中で、消えていくものもある。

小さな町をぶらぶら歩いてみると、そんなものが少しずつ感じ取れるのが面白い。

以上

### ◆ 稲毛を歩く (画像集)

